

### Y3-38

#### 標準予防策の徹底に向けての取り組み ～看護部感染対策委員会の活動報告～

諏訪赤十字病院 看護科  
藤森 洋子

【方法】看護師を対象として「手指衛生実施に関するアンケート調査」「个人防护具についてのアンケート調査」を実施。またMRSA検出数とアルコール手指消毒薬の消費量調査との比較を行った。

【結果および考察】H21年度より遵守率が向上したのは16項目中9項目にとどまった。特に清潔でない行為（吸引、排泄介助）の前の実施率は低かった。順守できない理由は「業務が忙しい」42%、「手が汚れているとは思わない」25%、「手荒れ」19%、「環境や物品の不足等に関する事」27%などがあげられた。年間のMRSA検出件数とアルコール手指消毒薬の消費量調査との比較においては、特殊な科を除く病棟の中では消費量の少ない病棟にMRSA検出数が多い傾向がみられた。より重点的に指導、教育をしていく必要がある。个人防护具については、吸引や頻回な下痢などのおむつ交換、あるいは汚染の多い創処置の際の手袋着用率は98%ほどであるが、必要な時に着用できていないその数%のスタッフの掘り起こしと教育が必要である。また、エプロンの着用率は84%ほどに、ゴーグルにいたっては着用率数%にとどまっていた。昨年の活動として、新人教育（集合教育）病棟での指導・啓発（委員中心）を行ってきたが、効果的とは言えない現状が明確となった。基本の知識・技術はもちろんのこと、「忙しい」急性期病院だからこその遵守の重要性を認識してもらうことが重要であり、その機会を現場に合わせた方法で行うことが必要である。

### Y4-20

#### 臨床指標を用いた医療の質向上への取り組み（第2報）～カイゼンへの道～

石巻赤十字病院 診療情報管理委員会<sup>1)</sup>、  
東北大学大学院医学系研究科 医療管理学分野<sup>2)</sup>  
松本 裕樹<sup>1,2)</sup>、阿部 寛子<sup>1)</sup>、伊藤 純平<sup>1)</sup>、  
成澤 千代<sup>1)</sup>、佐々木 功<sup>1)</sup>、追木 正人<sup>1)</sup>、  
谷 崇史<sup>1)</sup>、熊谷 一治<sup>1)</sup>、藤原 竜太<sup>1)</sup>、  
千葉 美洋<sup>1)</sup>、西條 美恵<sup>1)</sup>、八木せい子<sup>1)</sup>、  
植田 信策<sup>1)</sup>、小林 誠一<sup>1)</sup>、石橋 悟<sup>1)</sup>

DPCには医療の可視化というメリットがあり、それによりコスト削減や医療の質の向上等が可能になるとされている。

第1報では臨床指標検討ワーキンググループ（以下WG）の設置について、データの加工から算出までの一例、そして臨床指標完成までのプロセスを報告した。

プロセスについて簡単に説明すると、WGで検討した項目を事務局が様々なデータからエクセルやアクセス等を用いて算出し、再度WGで検討するというPDCAサイクルを何度も繰り返すことでより当院の実情に即した臨床指標を算出するという流れである。今回、第2報では、その後の活動においてWGをより発展させ診療情報管理委員会（HIM委員会）とした経緯と臨床指標を使ったカイゼン活動への取り組み及び今後の課題について報告する。